

進捗状況の概要 【1ページ以内】

平成27年度に本学ではアンカラ大学との大学間交流協定を更新するとともに、新規にエーゲ大学及び中東工科大学と大学間交流協定を締結した。福島大学でも平成28年度末までにトルコ連携3大学（アンカラ大学、エーゲ大学、中東工科大学）と大学間交流協定を締結した。これにより日土5大学の連携が担保され、授業料不徴収のもとの学生交換が可能となった。平成27年度は試行的にトルコ連携3大学から各1名（計3名）を新潟大学及び福島大学で3週間受入れた。また、平成28年2月末にはトルコ連携3大学のコーディネーター3名が新潟大学及び福島大学を訪ねて本事業取組内容を詳細に打合せ、実施方針について合意した。

平成28年度は、アンカラ大学と本事業独自の覚書を締結し、事業計画にある人数の学生交換を可能とした。短期受入プログラムを2回に分けて実施し、トルコ連携3大学から学生計15名を新潟大学及び福島大学で受入れた。中・長期プログラムではアンカラ大学から大学院生1名を3か月間受入れ、新潟県内でのインターンシップも実施、日本人学生チューターを配置し、生活支援に配慮するとともにトルコ人学生のインターンシップにも同行させた。また、トルコ人学生の健康状態を教職員が適宜確認し、異常時には即座に対応した。受入プログラムでは、全てのトルコ人学生に特別聴講学生または特別研究生の身分を与え、各プログラム科目の履修と、帰国前に開催した報告会での課題発表に基づき単位を付与した。日本の単位のECTS単位への互換に関する協議を行い、現在トルコ側において新潟大学で付与された単位の互換手続きを行っている。派遣プログラムでは、新潟大学で入学・進級ガイダンス時に本事業の紹介を行った他、新潟大学及び福島大学で留学ガイダンスを4月末に開催し、両大学で合計200名超の学生が参加した。短期派遣プログラムには定員15名に対して両大学で合計50名の応募があり、学生選抜後にトルコ派遣の準備を進めていたが、トルコ国内での非常事態宣言の発令を受け、学生の安全を第一に考慮し、平成28年度は学生のトルコ派遣を全て中止した。その代替プログラムとして、平成29年2月にタイ・チェンマイ大学に新潟大学及び福島大学から15名、アンカラ大学及びエーゲ大学から4名、合計19名の学生を短期派遣し、第三国において共に学ばせることが実現した。英語能力の継続的な向上を目的に派遣前後にTOEICまたはTOEFL等の英語能力判定試験を受験させた結果、目標値（TOEIC600点）以上のスコアを得た学生が15名中6名いた。また、平成28年11月には新潟大学の発案で、大学の世界展開力強化事業（トルコ）に採択されている東京大学及び東京藝術大学を新潟大学教員が訪問して情報交換等を行った他、日本・トルコ協会に本事業への協力を依頼した。同月にトルコ人学生との文化・研究交流を目的に、当初トルコに派遣予定だった新潟大学生による本事業独自のサークルを立ち上げた。彼らは平成29年1月に新潟大学で開催した「平成28年度FD及び学生合同ワークショップ」において英語による課題発表を行い、来日トルコ人学生と交流活動を行った。同ワークショップには外部アドバイザーボード（外部評価委員）（農業分野（新潟県農業総合研究所）、防災分野（株式会社プロテックエンジニアリング）及び日本・トルコ協会代表者）も出席し、その後外部評価委員会を開催、資料及び上記ワークショップの内容をもとに本事業の評価を受け、今後の事業展開に向け貴重な意見をいただいた。国際プロジェクト運営委員会改め国内運営委員会を平成28年4月及び9月に新潟大学で開催し、福島大学の担当教職員とともに、特に短期受入プログラムで精査すべき点や改善策案を検討した。また、日土5大学が参加した事業推進打合せを平成29年1月及び2月に新潟大学で実施、トルコ情勢について意見を交わし、より安全な研修ルート、現地での学生の安全確保を中心に検討した。さらに、平成29年3月に新潟大学及び福島大学教職員がトルコを訪問して国際連携運営委員会を2回実施し、セキュリティが強化された学生宿舎や大学構内を見学し、現地大学の安全対策を確認した。

【本事業における中間評価までの交流学生数の計画と実績】

平成27年度				平成28年度			
派遣		受入		派遣		受入	
計画※	実績	計画※	実績	計画※	実績	計画※	実績
2人	0人	2人	3人	21人	15人	21人	16人

※海外相手大学を追加している場合は、追加による交流学生数の増加分を含んでいる。

特筆すべき成果（グッドプラクティス）【1ページ以内】

本事業は、豊富な知識と深い洞察力、国際社会にも受け入れられる豊かな人間性を有し、日土のみならず、イスラム圏との架け橋にもなって、両者の農食分野及び災害復興分野の学術的及び経済的な発展に貢献する「レジリエントなグローバル人材を養成」することを目指している。

平成27年度は試行的にトルコ連携3大学から各1名（計3名）を新潟大学及び福島大学で3週間受入れた。うち2名は「グローバル農力養成プログラム」、もう1名は「グローバル防災・復興プログラム」に参加した。来日前のトルコ人学生らの持つ日本のイメージはメディアから得たステレオタイプなものであった。しかし、新潟の水害を前提とした農業システムや福島の現状や復興への取組を知ることで、日本の農業の現状と問題、大災害からの復興過程等についての理解を深めた。この経験は彼らにとって大きな「収穫」となり、「グローバル防災・復興プログラム」に参加した中東工科大学学生は、今回の留学経験をもとに更なる国際感覚を身に付けるため、同大学卒業後にイタリアの大学院に進学した。「グローバル農力養成プログラム」に参加した2名のうち1名は、平成29年1月開催の「FD及び合同学生ワークショップ」で再来日し、日本での経験や帰国後のトルコでの活動について発表した。また、新潟大学及び福島大学では、この試行的学生受入を通して次年度以降の本格的な受入を前に改善すべき事項（大学内宿舎のインターネット環境が悪く、発表資料や報告書の作成に不備が生じたためモバイルWiFiを購入、大人数の学生を授業料不徴収で受入れるために本事業に特化した覚書を締結）等を見出すことができた。

平成28年度はトルコ側連携3大学で70名超の短期受入プログラムへの参加応募があった。短期受入プログラムは2回に分けて実施し、計15名の学生を新潟大学及び福島大学で受入れた。新潟の稲作やバイオテクノロジー等に関する講義の他、水田や農作物への取組や水害対策を学び、また新潟県中越地震の被災地、地滑りや雪崩発生地を見学して、新潟の農業における課題をトルコと比較・検討した。講義・実習の際には日本人学生が自作のボードでトルコ人学生に分かり易く説明する等の授業補助をした。そこでは互いに興味ある分野について積極的に話し合う場面が多く見られた。講義や現地見学では全て英語で行ったが、トルコ人特任助教も同行し、必要に応じて通訳することで、受入トルコ人学生が学びやすい環境を整えた。福島大学では、東日本大震災の被災地訪問や、現在も復興に向け奮闘している人々や福島県の幼稚園児、ホームステイ先の家族との交流の中で生の声を聞くことにより、福島に対する不安や誤解が解け、正しい情報を持ち帰ることの大切さを学んだ。このように、トルコ人学生にとって新潟及び福島での学びは貴重な体験となった他、両大学の日本人学生や他の留学生との交流等を通して多様な世界観に触れることができた。日本人学生にとってもトルコ人学生との交流をきっかけに海外留学を希望する学生が多く見受けられた。なお、トルコ人学生の健康管理（心身ともに）は教職員が適宜確認し、受診が必要な際には通訳対応した。派遣プログラムでは、平成28年度はタイ・チェンマイ大学を派遣先とした代替プログラムを用意した。新潟大学、福島大学、アンカラ大学及びエーゲ大学から合計19名を短期派遣し、日本・トルコ・タイの3ヶ国における農業制度の違い等を学生間で話し合い、自国の農業を今後どのように向上させるかを検討した。派遣前には事前学習や安全管理オリエンテーション、事件に巻き込まれた際のシミュレーション等を行い、早急な事故対応を可能とするために全員同一の海外旅行保険に加入させ、たびレジ登録を徹底させた。また、緊急時対応がスムーズに行くよう、緊急連絡網を作成するとともに、派遣学生、引率教職員、及び新潟大学の日本待機職員間でSNSグループを作り、モバイルWiFiを携帯させることで逐次相互連絡可能な体制を整えた。派遣期間中は、毎日、引率教職員から当日のプログラム終了後に日本待機職員に学生の状況を報告させ、学生の安全を確認した。派遣プログラムでは、新潟大学の本事業独自の科目を履修する形で学生派遣した。福島大学生を新潟大学の特別聴講学生として受入れて派遣することで、それまでチェンマイ大学と交流がなかった福島大学の学生も派遣可能とした。事前に学生及び保護者からの確約書の提出を求めて理解を得ることで、大学と保護者の信頼関係の構築に努力した。さらに、学生には出発前、派遣先到着後、帰国後に保護者への連絡を徹底させ、心配を緩和した。トルコ人学生との文化・研究交流を目的として、当初トルコ派遣予定だった新潟大学生による本事業独自のサークルを11月に立ち上げた。「平成28年度FD及び学生合同ワークショップ」では新潟大学大学院生が冒頭の学部長挨拶をトルコ語に通訳し、事前学習で学んだトルコ語を大勢の聴衆の前で披露した。このように派遣・受入プログラムを通して学生は農食や災害復興分野における豊富な知識と深い洞察力を身に付け、異なる文化への理解を深めることができ、「レジリエントなグローバル人材養成」の達成に向け、事業が順調に進展している。